

県中教研 国語部会だより

第 34 号

発行日 平成31年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 出町 之孝
題 字 金山 泰仁 先生

主体的・対話的で深い学び

主任指導主事 砂土居 良江

2021年度から新学習指導要領が全面実施される。多くの学校で、新学習指導要領の理念を共通理解した上で研修テーマに取り込み、解明に向けて真摯に取り組まれている。中でも、「主体的・対話的で深い学び」をテーマとして、授業改善を目指している学校が多いように思う。

中学校教育研究会国語部会においては「言葉による見方・考え方」に焦点を当て、研究主題「言葉に対して、自覚的に思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の能力を高めていくための指導はどうあればよいかー言葉についての課題解決を主体的・対話的に行う授業づくりー」の下、各ブロックで研究が行われていた。

心に残る研究会がある。ある市で2年生のプレゼンテーションに関する授業を参観した。生徒が真剣に取り組んでいたのは、「うまくできるようになりたい」という強い願いをもっていただからであろう。他教科との連携を図り、単元構想の工夫がみられた実践であった。また、別の市で参加した授業後の協議会が印象に残った。授業者が解明したいと考えている課題を全員で共有した後、グループに分かれて話し合いが行われた。話し合いを深めるための写真や付箋の準備、司会者の打合せ等、細かい配慮が随所にみられた。授業者の課題を解明して授業改善の方向性を示し、参加者全員の授業力向上に寄与していた。共に学び、磨き合う教師集団の姿が、とても心強く映った。

「主体的・対話的で深い学び」をテーマにした授業改善が進められている。しかし、「主体的・対話的で深い学び」そのものが目的ではない。資質・能力の育成を図ることが第一義であり、そのための視点として「主体的・対話的で深い学び」があることを十分意識したい。実践を共有しながら、授業改善を進めることが、教師の授業力向上に直結している。中学校教育研究会での研究に、大きな期待が寄せられている。

(西部教育事務所)

言葉を意識すること

部長 出町 之孝

今年度は新しい研究主題、「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の能力を高めていくための指導はどうあればよいか」、副題「言葉についての課題解決を主体的・対話的に行う授業づくり」の下、研究を進めてきました。

研究の方向性としては、国語の能力を高めるために、言葉そのものをあまり意識することなく行っている活動を、生徒が「自覚的に思考・判断・表現する言語活動」になるように指導を工夫するというものです。

この研究主題を受けて、第62回研究大会が行われました。付けたい力を明確にして、「教科書以外の教材を開発する」「ジグソー学習を取り入れる」「生徒が互いに付箋を貼り合う」「画像を活用する」など、工夫を凝らした授業が行われました。「根拠を基に自分の考えをしっかりとつ生徒の姿がみられた」という授業後の感想をはじめ、参考になったという意見が数多く出され、有意義な研究協議が行われたことが伺えました。ご協力いただいた先生方に心から感謝申し上げます。

これらの成果を踏まえて、さらに研究を進めていきたいと思えます。例えば、授業の中で「どの表現からそう考えたのか」、「なぜ、その言葉を選んだのか」といった問いかけが、一層重要になってくるのかもしれませんが、一見活発なグループの話し合いも、上滑りなものになっていないか、付けようとした力が身に付くものになっているのか、といった視点が重要になってくるのでしょうか。生徒一人一人が自分の考えをもつ時間を十分確保することも大切でしょう。

生徒が言葉を意識し、言葉と向き合った結果として、「今日の国語の授業はとても楽しかった」と思える授業を求めて研究を進めていきたいと思えます。

(高・中田中)

第 62 回 研究

新 川 地 区

(魚・東部中)

(1) 研究授業

上田和裕教諭が「言葉を意識しながら思考・判断・表現できる学習課題の工夫」に留意し、3年生を対象に新聞コラムを教材に用いた授業を行った。本時のねらいは、段落のつながりや論理の展開を捉えさせ、総合的な学習の時間で取り組む意見文作成につなげるところにあった。生徒の実態に合わせ、学習教材を教科書掲載の「社説」から自選の「コラム」に変更し、自ら教材を作成された上田教諭の努力には敬意を表したい。

主たる学習活動は、異なる文章構成をもつ新聞コラムA・Bを比較しつつ、導入から結論にいたる段落の役割について理解を深めることであった。前半はワークシートを用い、個人⇒グループでコラムの文章展開について分析・検討していたが、授業中盤から双方の導入部分を比較（話題提示、事例提示のどちらが効果的か）する説明が長引き、意見文作成にこぎ着けることはできなかった。総じて、論理の展開を理解させるために、「導入」「事実や出来事」「過去」「意見」等の役割を示す用語を用いて文章構造を考えさせることは、ねらいに沿った学習活動であったと考えられる。

(2) 研究協議

参観者からは説明に使う用語の定義の曖昧さや学習活動の精選の必要性等、改善に向けた指摘があった。本実践を通じて、文章構成に着目することが筆者の意見の理解に有効であるとの実感を喚起できれば、生徒の主體的な読みにつながると思われる。

(3) 授業力向上のための講義

今回は「究極の語彙指導—『語感』指導の可能性—」と題し、富山大学人間発達科学部教授の米田猛教授にご講演いただいた。教授の話は実体験に基づいているため分かりやすく、内容も研究主題に合っており、今後の語彙指導に際し大変参考になるものであった。

伊井 昌彦 (下・朝日中)

富 山 地 区

(富・芝園中)

(1) 研究授業

芝園中学校では、二つの部会に分かれて授業研究を行った。兼松誠教諭による「調べたことを報告しよう」(1学年)の授業では、「パネルチャット」の手法を参考に、事前に行ったレポートを読み合い、気付いたことを書いて伝える授業が展開された。友達のレポートにどのような工夫がされているか考え、よい点やアドバイス、感想を書き合うことで、自らのレポートを改善するヒントを得ることができた。

また、廣田崇志教諭による「故郷」(3学年)は、ジグソー学習を取り入れた授業であった。「作者が読者



に伝えたかったことは何か」という大きな課題を解決するため、四つの課題を与え、4人グループで一人ずつに担当させた。前時には、同じ課題担当者が集まって話し合い、本時ではそれをグループに持ち帰って伝え、大きな課題の答えを考える活動を展開した。難しい課題であったが、真摯に課題と向き合う姿が大変印象的であった。

(2) 研究発表

大門弘子教諭(南部中)から、「話すこと・聞くこと」の授業実践例の紹介があった。台本に沿った話し合いを外から観察し、発言の在り方を検討する活動の実践だったが、大会当日には体験形式で行われ、今後の各校での取組に大変参考になった。

(3) 研究協議(指導助言)

高瀬知郎主任指導主事、海見純指導主事(東部教育事務所)から、「言葉についての課題解決を主體的・対話的に行う授業づくり」のための観点について指導助言があった。生徒が全員参加できる授業に向けた工夫等について、それぞれの部会でご指導いただいた。

恒田 浩史 (富・新庄中)

大会を終えて

高岡地区

(高・戸出中)

(1) 研究授業

山室美緒教諭が単元名「いにしへの心と語らう」から「夏草—『おくのほそ道』から」の授業を3年生で行った。本時のねらいは、高館を訪れた松尾芭蕉が目にしたものや思い浮かべたものを読み取り、「時のうつるまで涙を落としはべりぬ」と言った芭蕉の心情を捉えるというものであった。

冒頭で「芭蕉の眼前にあるもの」と「心に浮かんだもの」を確認した後、生徒は国語便覧や前時に使用したワークシート等も使いながら、根拠となる箇所を見つけ、芭蕉の心情を自分なりの言葉で表現していた。4人班での話し合い活動では、自分とは異なる意見を色ペンを使ってワークシートに書き込む姿が見られた。さらに、班での気付きや話し合った内容を全体で発表し合うことで、課題に対する自分の考えをさらに深めることができた。



(2) 研究発表

三崎篤志教諭（西條中）から、「言葉についての課題解決を主体的・対話的に行う授業づくり」について実践例の紹介があった。その中の1つとして、ICT機器を活用し、交流活動に生かす工夫が提示された。生徒の興味・関心の高まりや学びの可視化につながったり、比較・分類しやすいことから話し合いに必要感が生まれやすくなるというようさがあり、今後の各校での取組の参考になった。

(3) 指導助言

指導助言者の砂土居良江主任指導主事（西部教育事務所）からは、班での話し合い活動を課題解決に結びつけるための工夫や、教師が生徒に付けた力を明確にする視点をもつことの大切さ、学びを振り返る場面の必要性等について、具体的な指導をいただいた。

坂井さや香（射・大門中）

砺波地区

(小・大谷中)

(1) 研究授業

古村利一教諭が「感動や気付きが伝わるよう俳句を推敲しよう」という授業を3年生で行った。「推敲の視点」を学んだ後に、自作の俳句を班で読み合い、アドバイスを受けたことを基に推敲を行うという授業であった。

文化祭での展示という目的や、大会に投句したり、句会を行ったりした経験が、よりよい俳句にしようとする生徒の意欲を引き出していた。また、モデルとして提示された句を班ごとに推敲するという活動や、「推敲の視点」として推敲の具体的な方法（語順・語句の選び方等）を知ることが、主体的に言葉を吟味する生徒の姿につながっていた。



(2) 研究協議（指導助言）

研究協議では、推敲をする理由を再確認すると、推敲の基準が明確になり、授業展開にも広がりが見られるのではないか、という意見が出た。

指導助言者の高岡陽子指導主事（西部教育事務所）からは、振り返りとして生徒が自分の言葉で学びが示せる場をもつことの大切さや、付けたい力を明確にすることが評価につながることにについて助言をいただいた。

(3) 授業力向上のための講義

富山大学の米田猛教授をアドバイザーに迎え、「究極の語彙指導—『語感』指導の可能性—」の講義を受けた。言葉には意味と共に、私たちに与える『感じ』があり、それは表現や理解に影響している。そのため、より伝わる言葉を選ぶには「言語感覚」や「語感」の育成は欠かせないものであり、つまるところ国語科の究極の目標ではないか、との示唆をいただいた。

塚田 香織（南・井波中）

黒部市中教研

「短歌の魅力と指導法」

9月、県歌人連盟会長の上田洋一氏に、「短歌の指導法」と題し、講演をしていただいた。上田氏は、大伴家持や現代の歌人を紹介しながら、「万葉の時代から変わらぬ短歌は、古の時代の人々と心を通わせ、日本語の豊かさや美しさを感じられるものであり、その短歌の魅力を知り、好きな歌人に出会うことが大切である」「短歌のよさを存分に味わって創作活動に入ることにより、生徒は意欲的に創作に取り組み、表現する喜びを味わうことができる」とお話しになった。紹介していた短歌は、いずれも身近な素材を歌材にしていて、鋭い視点や新鮮な発見があった。

さらに、「生徒の気付きを尊重し、注目した対象がはっきりするように別の表現を提案するなど、生徒に寄り添った姿勢が大事だ」とご指導いただいた。今回の講演から、教師自身が奥深い短歌の世界に親しみ、その魅力を生徒に伝えていかなければならないと強く感じた。

栃谷 美紀（黒・高志野中）

富山市中教研

「全国学力・学習状況調査の結果分析から」

8月部会で、全国学力・学習状況調査の結果分析等を行った。この調査については、解説や報告書等が配付されているものの、十分に活用できていない現状があるとの声が以前から寄せられていた。多くの部員が集まる機会に、解説等を読むところからスタートしようと試みたのが、今年度の取組である。

まず、富山県全体の正答、無答の傾向を共通理解した。やはり例年の傾向と同じく、「書く」問題に対する無答率が高く表れていた。また、生徒の語彙力が乏しいことも顕著に表れていた。このような傾向を確認した上で、改めて調査問題を見返し、今後の各校での指導にどのように生かしていくかを小グループで討議した。参加した会員からは、今後の指導に生かすために大変有意義であったという声が聞かれた。来年度は活動内容をさらに充実したものにしたい。

恒田 浩史（富・新庄中）

射水市中教研

「文章の構成力を身に付けるには」

小杉中学校の高田雅行教諭が「説得力のある提案をするための工夫を話し合って明確にする」という学習課題で授業を行った。8つの班の代表者のプレゼンテーションを各自が評価しながら聞き、評価が高かった班がしていた工夫点について、全体で話し合った。



授業後は、授業を参観して気付いたことや課題点を基に協議会を行った。その中で、「今回は何を学習するのか、教師が示したことを生徒に評価させることが重要であること」「今後の言語生活に生かすには、『こんなことが分かった』と生徒が実感できるように、学んだことを一人一人に書かせることが重要であること」等が解明された。

今回の授業実践は、なぜ国語科でプレゼンテーションを扱うのか、私たち国語科の教員に改めて考えさせ、中核的な教科としての国語の役割を再認識させてくれるものであった。

坂井さや香（射・大門中）

砺波地区中教研（南砺市）

「筆者の工夫を自分の文章に生かす」

吉江中学校の河合仁美教諭が「ダイコンは大きな根？」で学んだ段落の構成や叙述の仕方を生かして「分かりやすい文章を書こう」という授業を行った。モデルの文を直すという課題に対して、分かりやすさのための工夫を再確認し、どう直したらよいかを話し合う学習活動が行われた。

モデルは文章から学んだ工夫を用いないと直せないように練り上げられたものであり、授業者の意図がよく現れていた。また、この学びを生かして他の野菜について説明文を書き、展示するという最終的な課題が示されており、生徒が見通しをもって主体的に学習に取り組むための手立てがなされていた。単元を通して付けたい力が明確になっており、その重要性を改めて感じさせられる授業であった。

塚田 香織（南・井波中）